アフリカの「闇」－子どもたちの悲惨な現実－

「木を見て、森を見ず」という言葉がある。日本の障害のある子どもの問題という「木」だけを見て、世界の子どもの問題という「森」を見ないことのないように心しているが、そうした折新聞書評が目に止まり、「子どもたちのアフリカ－〈忘れられた大陸〉に希望の架け橋を－」を読んだ。

著者は、新聞記者、国連職員、外交官（大使）として２０数年間アフリカに関わってきた経歴の持ち主。

その見聞体験、また、国連各機関や民間団体等の調査データ、報告書等から、サハラ以南の国々の「アフリカ」の子どもの現状を、「エイズ孤児」、「性的虐待」、「女性性器切除」、「子ども労働」、「少年兵」、「奴隷制」の６つに焦点あて、アフリカの「闇」の部分をルポしている。

例えば、エイズ孤児は１１００万人、少年兵は１０万人、毎年２０万人の子どもが「奴隷」で売買、１００万人を越えるストリート・チルドレン、１４歳以下の子どもの約３割が働いている。

また、世界のカカオ豆生産の７割が西アフリカの国々が占め、劣悪な労働環境のカカオ農園で「奴隷」として働く子どもの数は、１５０００人。

子どもたちは収穫するカカオ豆が何になるかも知らず。チョクレートを口にする裕福な国の子どもたちは、カカオ豆が誰が収穫しているかを知らない。

著者によれば、チョコレートの製法は、「カカオ豆を炒って粉にし、砂糖と牛乳と…そして、アフリカの子どもたちの汗と血と涙を加えたもの」と皮肉を込めて言われているとか。

著者は、「あえて、アフリカの『闇』をさらけ出したのは、現実を知っていただき、子どもたちとアフリカに何ができるか、を考える出発点にしたいと思ったからだ。」という。

また、先進各国が自国の思惑から、援助支援をしながらもアフリカの惨状をほぼ傍観してきたのは、ワシントンホスト紙の言葉を引用して「無関心による大量虐殺」でないかという。

数年前からユニセフに少しばかり献金している自分だが、ユニセフのパンフからだけでは知りえない、日本の子どもたちの現実からは想像を絶するアフリカの子どもたちの現実を知る「架け橋」となる本であった。

本には、更に詳しく現実を知る手段として、国連の関係機関や各国の支援団体のＵＲＬが数多く一覧・紹介してくれているが、英語が苦手な自分だけに、アクセスしても……。

（2005 年 6 月 28 日　記）